

令和7年度未来を創る学力向上支援事業に係る未来を創る授業力向上協議会（小学校国語）

1 目的

各小学校及び義務教育学校前期課程の教員等を対象に、学習指導要領の趣旨を踏まえた授業づくり及び授業改善に関する講義・説明等を行うことにより、小学校教員の指導力向上を図り、もって児童の学力向上に資する。

2 主催 大分県教育委員会

3 期日 令和7年6月26日（木）13:30～16:20

4 場所 別府国際コンベンションセンター（ビーコンプラザ） 中会議室

5 内容

（1）開会行事「大分県教育委員会あいさつ」

義務教育課 課長 小野 勇一

近年、経験年数の浅い教員の増加に伴い、特に教材研究や授業構想が難しいとされる国語科の授業力向上が本県の大きな課題であることが強調された。本協議会では、全国学力・学習状況調査の実際の調査問題を用いた言語活動の設定等について説明と演習を行い、校内研修や若手教員支援に役立つものと期待が示された。また、昨年の全国学力・学習状況調査の結果から、目的や意図に応じた記述や、事実と意見を区別して書くことに課題が見受けられることが指摘され、本県の課題を踏まえた授業改善の推進が求められた。最後に、本日学んだ内容を各地区・各学校に確実に伝達するよう依頼があった。

（2）行政説明・協議「大分県における小学校国語科の課題と授業改善」

〈説明者〉義務教育課 指導主事 釘宮 里枝

- 令和6年度の全国学力・学習状況調査において、大分県は全国平均を上回る良好な結果を示した。
この成果を維持・発展させるための方策が課題として提起された。

- 学習指導要領が掲げる「言語活動を通して資質能力を育成する」目標に焦点を当て、その具体的な実現方法について議論された。現場教員が言語活動の設定や資質能力の育成に抱える不安を共有し、全国学力・学習状況調査の分析と大分県の結果から明らかになった課題を踏まえ、授業改善のあり方が検討された。特に、令和7年度全国学力・学習状況調査の大問2を例に挙げ、資質能力育成のための言語活動設定の考察が行われた。単元目標から逆算して適切な言語活動を設定する授業づくりの手順が示された。

- 大分県の課題である「事実を自分の考えのように書いてしまう児童」や「書く目的や意図が不明確な児童」への対応として、言語活動で取り上げる指導事項の常時確認が重要であることが強調された。「書くこと」の領域における「考えの形成」は記述と一体であり、その書き表し方まで指導する必要がある。また、目的や意図に応じて書く力を育成するには、言語活動における目的と相手を明確に設定することが不可欠であるとされた。児童が「なぜこの表現をするのか」「どうすれば相手に伝わるか」を考えられる学習活動の準備が重要であると示された。

- 協議「資質・能力を育成する言語活動の設定と学習活動の工夫について」

- ・「書くこと 第5・6学年 ウ（考えの形成・記述）」→目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりするなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫すること）の資質能力を育成するために、どんな学習活動を設定すればよいか検討・協議を行った。
- ・具体的な言語活動「生活をよりよくするために提案する文章を書こう」※3次・4次を考える
 - ①個人検討 ※資質能力を育成する学習活動になっているかについて検討
 - ② グループ協議
 - ③全体共有
 - ・「いきなり書くことなく、例文を示す（よい例・悪い例）」
 - ・「書く前に視点を与える」



- ・「交流活動を仕組む・付箋を使って見通しをもたせる」
- ・「書く視点と読む視点を明らかにする（相手を意識させる）。学習評価をどこで設定するのが重要である」

●**行政説明・協議のまとめ**として、以下の3点が強調された。

- ・単元で取り上げる指導事項を深く理解すること
- ・具体的な目的・相手を想定した言語活動を設定し、目的や意図による内容・構成・表現の変化を意識させること
- ・資質能力の育成を可能にする学習活動まで丁寧に設計すること

(3) 講義「学習指導要領の趣旨の実現に向けた小学校国語科の授業改善」

＜講師＞文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官

国立教育政策研究所 教育課程調査官・学力調査官 大塚 健太郎氏

●文部科学省教科調査官の大塚健太郎氏による講義では、まず少子化社会において、子供たち一人ひとりが社会を支える存在となるための教育の重要性が強調され、小学校教員の「生き方」の土台を築く役割への感謝が述べられた。

○**本県の課題**として、本県の国語科における「事実を自分の考えのように書いてしまう」「目的や意図が明確でない」といった課題は、単なる言語活動の実施に留まる授業や、経験年数の浅い教員への指導不足に起因する可能性が指摘された。

○**学習指導要領の趣旨**は、「持続可能な社会の創り手」の育成にあり、改訂当時の課題として情報活用能力、多様な表現・理解の必要性、そして教科書依存度の高い言語活動の実態が挙げられた。国語科において言語活動は資質・能力育成の「手段」であり、「考えの形成」は記述とセットで、言葉を通じて概念を形成し表現する力が培われるべきだとされた。

○**授業改善の視点**としては「主体的・対話的で深い学び」が重要であり、教師は児童の主体性を引き出し、対話が生まれる言語活動や授業展開を工夫する必要がある。

・（具体的な指導事例）

6年生の単元における「主体的に学習に取り組む態度」と「書き表し方の工夫」の評価方法が示された。単元の目標を明確にし、言語活動を通して評価する重要性が強調され、指導と評価を一体的に捉える視点が提案された。具体的な評価観点として、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体的に学習に取り組む態度」それぞれの評価ポイントが説明された。

○**学習評価の改善**では、児童の「学習改善」と教師の「指導改善」の視点が重要であり、「学び方を学ぶ」ことの重要性が再強調された。教科書に依存せず、児童の実態や地域の状況に応じた授業のアレンジが求められる。国語科の言語活動は他教科の言語活動の充実にも寄与することが示唆された。

○「**個別最適な学びと協働的な学び**」の推進が言及され、ICT 端末の活用により個別の学びを深めつつ、協働的な活動で協働や発見を生み出す重要性が強調された。これらが一体的に進むことで、「主体的・対話的で深い学び」が実現し、資質・能力の育成に繋がるとされた。

○全国学力・学習状況調査の過去問を例に、**国語科の授業改善のポイント**が解説された。

- ・「話すこと・聞くこと」領域：相手の話を聞いた上で自分の考えを形成・更新する力に課題がある。
- ・「書くこと」領域：伝えたいことを明確にする力、書き表し方を工夫する力に課題がある。主体的に「考えを作る」活動の重要性が強調された。

・「読むこと」領域：説明的な文章の読解、特に文章と図表を結びつける力に課題がある。

○**語彙や言葉の知識**について、児童と教員の意識に乖離があることが指摘され、児童の視点から学びを捉える重要性が示された。

○2025 年度の全国学力・学習状況調査問題からは、実践的な対話能力の育成や、共通教材を用いた個別最適な学びと協働的な学びの融合による単元設計の可能性が示唆された。

●**講義の総括**として次の3点があげられた。

- ・授業の目的は「指導事項の育成」であり、言語活動はその「手段」に過ぎないことが強調された。活動の楽しさだけでなく、それがどの指導事項の育成に繋がったのかを教師が理解し、児童にフィードバックすることが不可欠である。
- ・「教師が教え込む授業」から「子供が学ぶ授業」への転換が強調され、児童が自ら学びをモニターし、PDCA サイクルを回せるようになることを目指すこと、そのための強力なツールとして ICT 端末の効果的な活用が提案された。
- ・今後の学習指導要領の方向性としては、「質の高い深い学びの実現」と「分かりやすく使いやすい学習指導要領のあり方」が挙げられ、自己調整能力の育成や AI 時代における国語教育の根本の再考が示唆された。